

程を見ればこうした周期的循環が繰り返されている。然るに最近百年來、支那は『外国民族の侵略』及び『人口の移動』を経
て来ているのに、所謂『人文の進歩』は依然として到来しない。
これは果していかなる訳なのか。と自ら問い、これに対して次
の如く説明している。

「こうした疑問は少し綿密に考えて見れば決して不思議な事
でないことが判る。何故なれば、この問題の中心点はすべて経済
上にあるからだ。以前支那を侵略した外国民族は究極に於いて
たのである。だが現在ではそれは行かない。支那を侵略する外
国民族は、その経済的發展の段階に於て、既に支那民族を遙か
に凌駕している。彼等の産業は断然先進的地位にあるが、支那
はそれとはまるっきり反対に、産業的に後れている民族である。
云々」
現代支那の立つ客觀的条件が従来の支那史の場合とは根本的
に異っていることは事実である。この点を看過せる類推は無益
の技といふべきである。

前節において支那社会の歴史についての幾つかの区分法を提
出したが、その目的は支那の歴史がどういふ風に便宜的に分け
得られるかという点ではなく、支那社会がどういふ風な根本
的な線に沿って変遷したかを知ることであつた。しかしそれ
は現代支那社会へ齎された歴史の遺制が、いかに根深いもの
あるかを明らかにすることと関連しているのである。
以上の歴史的考察に基づいて支那社会の特徴は最も深くその
農村社会の中に保存せられていくことが出来るであらう。
農村社会そのものは現在も依然として支那社会の根底であり、
支那社会の性格を決定している源泉もまたその中に保存されて
いるのである。
支那農村社会の構成のうち支那社会の歴史の停滞性の根源
を求めるとはいわれなきことではない。勿論この農村社会は
原始共產制時代の古より奴隸性時代、封建制時代、現代と変遷
して来ているが、農村における父系ないし父権氏族制及び父
権の大家族性を一貫して家長制的専制主義が貫いていること
は事実である。この種の制度が支那の農業経営の形態と相俟つ
て土地の細分化と零細農業を決定してきたのである。

歴史の制約と現代支那

この農業は、特有の家内工業と堅く結びついて今日までなお
広範囲に維持されている。支那の農村の根柢を零細と零細
の家内工業の結合に求める人は少なくない。
言うまでもなくこの点は同時に支那社会の發展を停滞せ
しめた最も大きな原因でもある。カインツォフオージェルはこれ
「鐵に堪えて抵抗するこの零細な零細経営」と呼んでいる。
次に問題となるのはこの農業社会に加えられた中央集権的国
家の専制の権力である。かかる権力と農業社会の結びつきは周
時代においては王朝ならびに諸侯との直接関係であり、封建制
時代に入つて以後は官僚階級の存在を通じて行われたものであ
ると見ることが出来るであらう。官僚階級は同時に農村におけ
る地主と一致し又は強く結びついていた。
奴隸制的又は封建制の国家においては、例のアジアの生薑様
式論で強調される治水問題が重要な役割をつとめる。治水問題
は河水の性質上黄河において特に重要であり、水利問題は黄河
にも勿論重要であるが、揚子江その他南方の河川において特に
水利、主として灌溉が重要な問題である。支那の集権的な国家
は単に国家権力として政治的な力を有つばかりでなく、治水
水利の問題を通じて経済的な機能を發揮するのである。
この場合支那独特の官僚主義が強力な機能を發揮するのである。
官僚主義はまた支那封建社会における村落の土地所有関係と
中央国家における集権的専制的な支配を結び付けて支那社会の
或る種の安定作用をなすとともに、一方に於てはまた停滞的作
用の中心を形造つて来たものである。官僚主義は特別の重要な性
質を見ればこうした周期的循環が繰り返されている。然るに最
近百年來、支那は『外国民族の侵略』及び『人口の移動』を経
て来ているのに、所謂『人文の進歩』は依然として到来しない。
これは果していかなる訳なのか。と自ら問い、これに対して次
の如く説明している。

支那の官僚制は集権的な専制主義の中心を形造るとともに一面
地方的な勢力として地主階級をつくり、又強力なるインテリ
グエントを従えているのである。この封建的、父権的、専制主義はこ
の近年まで支那社会の支配的勢力であつたし、現在においても
尙その後を曳いて残つて来ている。これこそは全支那社会を縦
横貫く関係である。支那社会を担う大多数の農民は一般的に
この強力な力に對して、殆ど全く権利の無いに等しい地位に立
ちあつかも半農半奴隸的、半奴隸的な地位に居つたといつてよい
のである。支那においては、古代国家たる奴隸制社会の土地所有
においても、又その後の封建的な土地所有の関係においても、
それ自身としては完全な發達が出来なかつた。その理由は既に
述べたる如く農業社会の特殊な権力が強かつた為たといふことが出来る。
家及び官僚の専制的な権力が強かつた為たといふことが出来る。
この支那社会の専制的な支那といふものはひとり農業関係ばかり
でなく、手工業及び商業においても同様である。手工業更に手
工業の組合、商業上の同業組合などがそれとして發達し得なかつ
た事情はかかる封建的な専制的な権力関係が存在したためであ
る。つまりこれらの組合には強力な国家権力が必ず介入して来
て、これに依存することなくしては存在し得ない事情にあつた
のである。
かくの如き旧支那社会における前資本主義的な集権的権力は、
最も特徴的なものであつたといふことが出来るのである。この

歴史的な支那社会の特性は現代支那社会まで持ちこまれて、その二大特性たる支那社会の半封建性及び半植民地性を規定しつつ流れこんでいるのである。半封建性は直接に、半植民地性にかかる半封建社会に対する列強勢力の接触面において生じたものということが出来る。

支那社会の文化の領域においても、この種の権力的関係に制縛されているのである。宗教関係等についても支那においては普通教権と俗権というものの対立は存在していない。それは儒教が正に國家的の宗教であるがためである。儒教は国家そのものを最高の道徳とする主張である。この点では支那社会においては宗教と俗権が分離する必要がなくなっているのである。帝王は国家の元首であると同時にこの宗教の教主であるわけである。儒教は元来かかる強権と、父権的な家族制度の擁護者として発達したのである。

儒教の中流社会道徳は、支那国家と官僚機構とを維持するに絶好な教義であった。

林語堂は幾分民間哲人らしく儒教と道教を次のように比べている。

「儒教の中流社会道徳は官服を着た連中や、彼等に叩頭する一般人には驚く程効果があった。然し官服を着ることを欲せず、官服を着した連中に叩頭しない人間もいる。そうした人間には儒教の全然ふれない一段と深いものをもっている」と。彼は儒教と道教との関係を述べて、儒教は権力者或は権力の関係に連なる者の哲学であり、考え方である。しかし、道教はこれ等の権

力に關係の無い一般の者、或いは一度権力を離れた者の最も愛する所の哲学である。しかし支那人はかかる権力に近づき得ない者が非常に多い。随つて支那人の考え方には非常に道教的な影響が強いという風に説明している。然しながら道教もまた、強力なる國家的権力、社会的権威に対して批判的宗教とはなり得なかつた。これもまた、しばしば権力との結びつきを求めたのである。道教は唐代に於ては國教となり、魏・晋の時代に至つてその流行は儒教を凌駕した。ただ道教の変形したものがしばしば農民暴動の結社的運動の指導力となつたことはその本来の世界の性質に基づくものである。

支那においては文学、哲学、科学等、その他多くの文化的領域の問題は、これは殆ど國家的権力の下に強力な層を構成している官僚階級に從属したものであつた。つまり支那社会のかかる特質の爲に文学、哲学、科学等が悉く制約を受けていたのである。例えば哲学について言えば、この種の社会においては事実上儒教以外の存立を許さないのである。この意味において行動の哲学である陽明学の如きもまた、根本的にはこの国家学たる儒教の範疇を脱し得ないのである。すべて官吏採用試験たる科擧の制度が学問の性質を制約するに役立つことは注目し得るのである。自然科学の領域においては、単に天文学とその補助科学であるところの数学しか発達していない。これは支那社会の直接の要求に基づくものである。即ち支那が農業社会であるという關係から、当然天文学が発達し、これにともなつて或いは工事であるとか治水の關係で数学というものが或る程度

発達を示したのである。その他詩、繪画、彫刻等は何れも支配階級たる官人社会と直接に結び付いたものである。かくて支那社会の根本的な特徴によつて、社会の上層に栄えた文化も悉くかかる制約を受けているのである。それ故に支那社会の生産力の発展を阻んだ原因は同時に文化の諸領域に於てもその発展を阻んで来たということが出来るのである。

支那革命の先驅的役割をつとめた、一九一七年北京大学を中心として起つた所謂文学革命が儒教攻撃、家族制度排斥或いは婦人解放を叫んだことは、支那社会の特質と関連してその意味を理解しなくてはならないのである。

現代支那の特徵的諸様相、封建的諸要素の濃厚な残存

官僚、地主、郷紳

現代支那社会における封建的遺制を理解するためには、封建社会の中に特殊的な発達を遂げ、封建末期に到つて特に重要な地位を占むるに到つた官僚制度を明らかにする必要がある。支那の官僚制度は支那国家機構における中心であるばかりでなく、農業社会における中心であつた。この両者はまさに同一のものであつて、支那社会構成の中核を形成して来たのである。農村における地主は官僚の母体であり、また官僚の後身であり、実に官僚をそれ自体でもあつたのである。

現代支那政治において少なからざる地位を占める軍閥もまた官僚の特殊の一形態に過ぎないのである。順序として官僚から出発しよう。

支那の官僚は、支那社会の東洋專制的な國家機構と支那の農業社会における農業共同体的な組織とを繋ぐ支那政治上の極めて注目すべき地位に立つものであつた。樞樞氏は、支那社会の最も重要な特徴として、この官僚階級の存在をあげている。支那における官僚は先進資本主義国における単なる事務的官僚と

は、本質的な相違をもった存在である。支那の官僚は単に官吏個人に限定されるものでなく、官吏の家族、而も支那社会独特の一つの氏族、宗族的なつながりというものをその中に含んでいる。———そういう縦にも横にも広った一つの官僚階級をいうものである。官僚は一つの社会階級———といつては語弊があるかもしれないが、一つの大きな集結された社会的勢力である。かかる種類のものは既に検討した支那社会の最も特徴的な所産であることは問題のないところである。この官僚は地方においては地主であり、中央政府の官吏からして地方に下れば地方官として、また野に下れば地方の紳士として、郷村の紳士———郷紳として極めて大きな勢力を持つわけである。政治的権力によって蓄積された富は土地に投下され、官僚を郷紳たらしめるのである。

註 僑氏は次の如く書いている。

「郷紳の存在は私の所謂官僚階級の存在を立証するところの最も有力なる事実である。而して官僚階級なる一大社会階級の存在が眞の意味に於ける支那社会の特殊性を示すものなることは嘗て議論せるところである。」「支那社会研究」三四頁。

官僚はまた単に地主たるに止らないで、商業資本の或る程度の発達もこの支那官僚の手に握られていたのであった。商業資本の多くの部分は官僚の手に蓄積せられるが、官僚の非生産的性質の故に発達せず、却つて商業資本本来の発達をも阻害したのである。地方的に農業社会においては官僚が地主であると同時に、商業資本家であり、又しばしば高利貸資本を代表すると

いう、特別な地位を持ったものである。かくの如き理由をもってこの階級は実に長い間、支那の政治の内面的な主体的地位を保つて長く存続して来たわけである。国民政府が北伐のスローガンとして打倒「土豪劣紳」を真先に掲げたことは、その立場からしては意味のあることであつた。この支那における一大官僚機構がどうして維持されたかと言えば、それは根本的には、官僚が一つの大きな階級を作つていて、そしてそれは全国的な農業社会と特別に結びつたものであるという点に在るが、これを制度的に存続せしめたものは所謂科挙の制度であると思ふのである。この科挙の試験制度は、隋の末期から起つて唐代を経て、殊に宋の時代に至つて完備した制度であつて、この制度に依つて人材を地方から登用し、これをもつて官僚群の新陳代謝を行い、これを制度として維持し続けて行つたということに因るのである。この科挙制度の確立する以前には一種の選挙制度、即ち地方に隠れている優良な者を推薦して官吏として登用するという制度が行われていたように思われる。この時代は、後に科挙制度の時代になつて学識とか或いは技能というものが標準になつたとは異つて、その者が親孝行であるというやうなことが非常に大きな目標になつていたのである。このことの意味を考えると、要するに支那社会の父權的な家族制度そのものの維持という点から見て親孝行ということが一番大きな現実の意味を持ったからであつた。かかる意味に於ては正に支那社会の性格を現わした制度であつたわけである。

科挙の制は幾多の弊害を伴ひ、清朝を亡したものは科挙の制

であるとまでいわれるにいたつたのであるが、しかし腐朽せる封建的王朝と官僚機構とを維持するためには必要なる制度であつたのである。

次に、あらゆる封建的関係の中核をなしている地主の地位について一瞥しよう。統計の示すところに従えば、支那農村において農家総数の一割を占めるに過ぎない地主、富農が最も多くの最も良好なる土地を所有し、農家総数の七割以上を占める貧農、雇農が貧しい土地を僅に所有することを示している。

註 一九三三年、陝西、河南、江蘇、浙江、広東、広西、六省調査報告によれば

類別	戸数	所有耕地
地主	三・五%	四五・八%
富農	六・四%	一八・〇%
中農	一九・六%	一七・八%
貧農、雇農	七〇・五%	一八・四%
又同年広東省だけについて、陳翰笙氏の調査によれば		
地主	二%	五三%
富農	四	二三
中農	二〇	一五
貧農、雇農	七五	一九

地主は農民に対して封建的な搾取方法を保有している(労働地代、現物小作等)。更に小作料以多に農民は地主に対して種々なる費用を払わされる。

かくて農民の手許には辛うじて家族を養うに足るだけの穀物しか残されていない。多くの人は次の収穫まで自分の収穫物を

持ちこすことは出来ない。彼等は地主に泣きつくのである。ここに地主に対する小作人の債務的隷屬化が始まるのである。

商業資本の支那村落への浸潤は村落経済の半封建的性質を變ずることはなかつた。農民に対する誅求の中世的方法とそれ自体封建的性質を包蔵する商業資本の結合を齎しただけである。

農村において封建的権力の一切の源泉たる地主階級の地位も近年における支那社会の急激なる変化とともに変化しつつある。經營の零細化は總べての農業經營の種別に現われているが、地主の所有面積の減少にもことに著しい。地主の数の減少も見られる。

この事情について天野元之助氏は次のように説明し「新興地主」の抬頭を指摘している。

「所謂在郷地主は、小作農より収租して生活するが、同時に租税・公課・軍事負担を納める。然るにこれらの負担は、近年著しく増加した。例えば江蘇無錫では、此の十年間に田賦が八九%の増加を見た。又一九三〇年四月より十月に河南の南部及び中部各県では、軍事徴発が田賦の四十倍を超過したという風に、在郷地主や富農は、その為に小作料を引上げて、小作農に負担を転嫁したとて、その引上げには一定の限度がある、加うるに近年の災荒、それに伴う匪賊の擄奪、其の他の農産物価の下落等による生活上の脅威は、ついにこれらに耐え得ぬ地主、富農をして土地を典売或いは放棄せしめるに至る。かくして在郷地主の没落の趨勢を辿つて来たと共に、一方に不在地主の抬頭が見られる。その中には課税・匪害を免れる為、農村より城市に

紳としては各県の区長、国防局長等がいる。即ち土豪劣紳の中には盛大の家族、門生故吏、役人の書生、前清の秀才拳人等、知識階級、退職官吏、各区郷の団練黨事等で、多くは地主を兼ねていること。

紳士は有職無職の官吏を根幹としている。それはもと地主であり、商人であり、高利貸である。また大官であり、大將軍である場合もある。彼等は租税の賦課を引受けるのである。都市にもまた紳士は存在する。紳士は大むね科擧を通過せざるものである。支那において学問をした士人、即ち読書人は特に一般体力労働者とは別に高い位置と尊敬を与えられる。士人階級は在朝と在野とに分れ、在朝は即ち官吏であり、在野は紳士である。この両者の社会経済的基礎は同一であるが、国家権力に対する関係に於ては時として相容れないものがある。これら紳士階級は在朝の官僚に対しては反感をいだく場合があることは当然である。彼等はしばしば秘密結社をつくり農民暴動を組織したのである。支那歴史史上最大の農民暴動の指揮者洪秀全は潦第秀才であったことはよく知られていることである。

紳士はかくの如き根柢に基づいて発生した。彼等は農村或いは都市に就いてしばしば一般民衆の収養者として立たざるを得なかった。彼等はかくて土豪・劣紳の名を以て呼ばれるに到ったのである。

註 土豪を特に紳士の破産したものであるという風に説明するものもあるが、特に両者を区別する必要は無いと思われる。

移った地主も勿論ある。そしてこれ等の者の手に地権が偏集しつつある。」

これは要するに農村の一般の荒廃の現象を物語るものなのである。かくの如き「新興地主」の性質もまた支那社会の根本的な性質を完全に映するものであることはいうまでもない。ただし著しく複雑な様相を呈していることが看取される。即ち、「かくの如き賦税を免れ若くはこれを負担し、今日の経済危機に処し得る地主にて、高利貸的地主・高利貸的商人・高利貸的官僚と『三位一体』を身に兼ねた者が多い。一九三〇年春、江蘇省民政庁が同省の一千畝以上の大地主五一四人に就いて調査したところ、大地主中には高利貸を主たる職業とするものも少くないが、その殆ど全部がそれと何等かの関係を有する。又多数の大地主は文武官僚でもある。即ち彼等の収入が租税と地代との両者から成っている。更に大地主の中には、商業を営むものも少くない。陳翰笙氏も言う如く、地主はしばしば鹽場、油坊、穀庫、塾坊等を經營し、他方倉庫及び雜貨舖の所有者は、土地の抵押権者であり、遂には其の所有者となる。地主の営む典當・商舖等が何らかの形式で、文武当局者の經營する新銀行と連絡のあることは、衆知の事實である。

支那の地主は、ますます活潑となり、新に政界に入り、新事業に着手している。政治及び新事業の變転止むなき性質と相俟つて、彼ら自身の性格も変しつつある。」(昭和十二年版『支那經濟年報』第二編 村問題)

一九二五—二七年の支那革命において「打倒」の目標とされ

た「土豪劣紳」は以上の如き官僚、地主、富農階級を總括的に指すのであった。

土豪劣紳の発生に關し中國共產黨首領毛沢東は次のように述べている。(『アジア問題講座』卷一、長崎勳氏、「土豪劣紳と軍閥の本質」より引用)

「第一は門閥である。門閥というのは某姓の中で地位が高く、権力を有するもので、同姓及び親戚知己はそのために社会上の地位が高くなり、すべてに優越的利益を享くるものである。言動が不正でも人が咎めず、故意に人民を侮辱しても門閥の声威に対して反抗しない。例えば張家が状況に合格して、農商總長となるや、何の知識もない彼の民が郷里の南通州で一切の專横をやつても、その土地の農民は彼の足下に拜跪した。その間に張姓の者又は張家と關係あるものは皆勢力を得、知らず識らずの間に一つの門閥を形造り、多くの土豪劣紳がこれから発生した。

第二は知識階級から来たもので、支那のように民衆の知識程度が低い所では、多少の知識があれば、これを利用して地方官吏と結び、各種の虚伝を放つて農民を欺騙し利欲を計るものである。

第三は過去又は現在における地位権勢を利用して土豪劣紳となつたものである。例えば広西軍閥の頭目陸榮廷が今は退職して江蘇省の姑蘇に広大な田地を買入れて老を養つているが、人民は彼の過去の地位に対して尊敬を払い、彼自身も傲然紳士として威張っている。現在の権勢を藉りて人民を欺騙する土豪劣

軍閥、土匪

支那の半封建性の最も代表的、特徴的な現われとして支那軍閥の問題がある。虎よりも恐ろしいと言つて支那の民衆に怖れられている支那の軍閥はいかなる性質のものであるかということに先ず探究して行きたいと思う。

支那の軍閥において我々の特に問題とするのは民国革命以後の軍閥である。歴史的に見た場合支那社会には軍閥的存在は古くからあつたところであり、治亂興亡の後を顧みれば多く軍閥抗争の形を示している。しかしながら我々がここに問題とするのは近代軍閥であり、その特徴は彼等が本来封建的土地領有者であると共に、先進的外國資本勢力の支那進出(半殖民地化過程)に關連して、その過程に於て発生した形態たることにある。

清朝末期以後、新しい意味での軍閥として日本人の頭に強く印象されたのは袁世凱である。彼こそは近代支那軍閥の代表者であつた。しかしこの軍閥は勿論支那社会の特殊性に基づいて発生したものであつて根本的には官僚又は地主と同一の社会的根柢に立っていることはいうまでもない。支那社会がくりかえし見舞われている戦亂と騷擾とは官僚階級とこれに軍事的要点を加えた軍閥によつて醸し出されたのである。近代における軍閥の巨頭袁世凱は天津に新しい陸軍を外國の援助により、外國のモデルに従つて作つた。これが所謂北洋軍閥であつて、次第に巨大な勢力となり、彼に養成された新しい軍人が支那の新しい

い軍閥を形造つて辛亥革命前後の支那政局に顯著なる役割を演じ、更に現在までその跡を曳いているのである。

支那の軍閥の最高の野望は集権的専制の王座に座ることである。袁世凱はこの軍閥的な野心を最後に現わして失敗したのである。張作霖もまた北京でのお手盛りで太総統に成つた。これは何にもこれらの人物の個人的野望というよりは、支那社会における封建的な支配体制がそつた方向に強力なる軍閥を擧げて赴かしめる性質をもっていることを示している。支那における「ファシズム」の成立が新しい問題となつた時、蒋介石の総統がしきりに問題となつたことはやはり同じ基礎の上に蒋介石支配の本質があると見られたからである。

袁はもと前清の一將軍の食客であつたが、朝鮮を纏る日本との抗争に登揚して男を上げた。彼の勢力を張り得た理由は北洋軍閥を擁したことに基つたのであるが、更に重要なことは外国の援助を彼が確保し得たことである。辛亥革命に際して行つた騒引は最も愚昧なものであつた。彼はほぼ天下を掌中に押えると、各省に都督(後に督軍となる)を置いたものである。これが所謂督軍政治である。彼は第二革命を弾圧すると共に帝制を企て、一九一五年末即位を宣し翌年一月元旦号を洪憲と改めた。然るにこれに対する猛烈なる反対は第三次革命となり遂に彼を溺死せしめた。彼の野望の失敗の根源は実は支那社会の性格を根本的に変革しようとする新しい方向が、既に決定的の段階に入らうとしておつたのにぶつつかつたことにあり、頗る深い根拠があつたわけである。

註 一九〇二年軍隊教育における画制が実施され、直隸總督袁世凱に對しヨーロッパ式軍隊の編成が委任せられた、一九〇六年六カ師二万二千人より成る近代化軍隊が形成された。

近代軍閥政治は袁世凱によつて確立せられ、北京には有力なる軍閥、又は有力軍閥の代表、或いは各派の中間的存在が中央政府を形造り、地方にはそれぞれ実力ある軍閥が割拠状態を示したのであつた。中央政府の督軍任免権は殆ど有名無実であつた。総統徐世昌の時の如きは中央政府はもはや名のみで彼は北京城に拠る一軍閥に過ぎなかつた。地方督軍中有力なものの中から二、三省を統轄する各省巡閱使が生れた。

この情勢は進んで中央政府を争う軍閥の争覇戦が行われ、一九二〇年の安直戦争、一九二二年と一九二四年の二回に互る奉直戦争、引き續いて馮玉祥クーデターが行われたが、一九二六年広東國民政府は直接に軍閥打倒の旗印を掲げ北伐を開始したのである。それは軍閥にとつて直接的な問題であつたのみならず、軍閥を培つて来た基礎地盤たる支那社会の特質そのものを變革する意味を持つものであつた。

長野野氏は軍閥の性質の特徵を次の如く挙げてゐる。

第一に、組織に於て、軍閥の親分乾分式による一つの私党で、軍隊は親分の命令によつて動くが、親分の命令がなければ中央政府の命令では少しも動かない。また地方的団体であつて一の郷土閥である。直隸派、安徽派、奉天派、広西派、浙江派等の如く同郷人により軍權を独占せんとするものである。

第二は、軍閥は或る程度生長すれば、細胞の如く分裂する性

質をもっている、一つの私利団体で、上下は利害關係によつて結ばれているから、親分について行つて出世し、旅長、師長になれば独立性をもち、それ以上は自ら督軍たらんとし、軍閥が大きくなれば分裂し、また生長しては分裂する。また戦争がなければ親分乾分式だから何時までも出世しない。そこで戦争により師長を督軍に押し出せば部下の旅長は師長に、團長は旅長といったように一段ずつ昇つて行く、こうして軍閥は絶えず内争を繰返すのである。また同じ意味で軍閥拡張は絶えず行われ、軍隊は増大し人民の誅求は進んで行く。

第三に、軍閥は本来私利的団体とし、これにより強力を以て誅求横奪を行い、私利をみだし、督軍を数年やれば数千万の富を積んだもので、中には一億位の巨富を擁したのもあつた。また利益による結合であるから戦争のような投機的な場合には、孰れが勝つてもよいように、各々敵味方に秘かに款を通じているから、戦況が一度一方に有利に傾けば、忽ちにして大勢を決する。(『アジア問題講座』第二巻 七五頁―七六頁)

この軍閥なるものは、支那社会の特殊な性格に深く根ざしたものであることは以上の説明によつても明らかである。軍閥の問題は現在もなお支那政治の中心問題の一つである。極く最近まで支那の軍閥問題というものは支那の内外の政治の上に特別な重要な位置を占めて来たのである。支那事変は既に述べた如く一応は、近代支那を結合させて、殊に最近結合の方向に向わしめていた紐帯を、ばらばらに切りほどく性質を持つものであり、従つて一応支那社会の根本的性格を表面に洗い出すことになる

という關係は、軍閥問題についてもい得られることであつて、今後事変が進むとともに軍閥の動きに特別な重さを与える性質の時期が生ずるといふことは考えられることである。勿論そういうもののこれ等の軍閥が軍閥本来の性格とおり動くことによつて何等か極めて大きな政治的の意味を持った結果を齎すといふような意味ではない。軍閥そのものがかかる役割を遂げ得るかどうかといふことは支那の直面すべき内外の政治情勢によつて決定されることであると言える。

近年における蒋介石政権の統一過程は少くとも形の上では地方軍閥の整理を遂げて来たのである。またこれとともに「南京軍閥」の性質をもつ蒋介石政権の内に形式的に内包された地方軍閥的勢力は清算し得なかつた。また日支事変の経過は或る意味において蒋介石の軍閥勢力清算の機会を与えたもののように見られる。冀察の宋哲元、山東の韓復榘、山西の閻錫山、広西の李宗仁、白崇禧の軍閥的勢力は殆ど払拭されたかの觀がある。しかしなお問題が既に完全に解決したと考えることは軍閥と支那社会との特殊な結び付き方を知らない者であらう。

支那社会自体が根本的な變質過程に立ちつつあることは事實である、しかしながらその過程自体は現在の社会において特殊な地位にあるものを一応浮びあがらしめる作用を営むであらう。現に四川或いは雲南軍閥の動向は、支那内外において注視の的となつてゐるのである。

軍閥の社会的地盤と根本的な性格をあらわす実例として四川を例に採らう。四川こそは地理的にもまた政治的經濟的にも支

那の他の部分と最も隔離されており、社会的条件において取り残されているという関係において、正に半封建的支那社会の縮図でもあるという意味において、四川に拠る四川軍閥を採上げることは可なり興味のあることである。かつ四川軍閥の動向は現実政治の場面においても将来に問題を依然として残しており、現に汪精衛の声明をめぐって四川軍閥の動向が既に各方面で論議されているという事情の存在していることは周知の事実である。重慶に抗日支那の中央政府が移されて、中央の勢力が四川に入ることが決定されてからはほつほつと四川軍閥の不安とあがきが伝えられたが、既に一九三七年末中央が張群を四川省主席に任命した場合においても四川軍閥は挙つてこれに反対し結局、中央も四川軍閥の意向を尊重して王績緒を主席に任命しておさまった事実もあつたのである。

近年における四川軍閥割拠の基礎をなしたものはその防区制度である。四川における防区制度は封建的勢力の構築と抗争を可能ならしめるような仕組を成していた。四川は民国革命以来二十数年互つて絶えざる抗争を続けて来た所である。社会経済的には元来四川は旧式の農業を持ち、手工業も極めておくれた封建的な段階にあつたのである。これに対して資本主義化された支那の部分の影響が揚子江を溯つて贛州、万県、重慶と揚子江に沿つて上つて来たという状態であつた。四川軍閥の割拠の地盤関係はそれぞれ経済的な発展段階を異にしたところにあつた。四川内部はあたかも支那全体を採つて見た時と同じくハヅキリした形で経済発展の異つた区域に分かれ得るのである。

しかしてこれが又、防区制度面分の根拠になつていたのである。

ここで経済発展の段階の差異を概括的に言えば、揚子江を溯つて四川に入り重慶に至るまでの揚子江を挟んだ両側の地帯が比較的資本主義化された地帯であつて、これは四川の前の省主席であり四川軍閥の雄たる劉湘の地盤であつた。劉湘が四川軍閥の混戦に結局最後の勝利を占め得たのは、重慶を中心としたこの省内で最も経済の発展した地域をその地盤として保有していたからである。その次に発達した地域は重慶から更に上流の方、揚子江を溯り成都に達する成都重慶間の流域地帯であり、最も封建的な地域は西康省の方に隣つた打箭炉を中心にして南北に伸び、北の方では岷山、松潘などの極めて未開の地域を含んでいる地域である。最後に、前述の資本主義化されている第一の地域と第二の地域に隣つた四川の西北地帯がある。これは共産軍の徐向前軍が入川して最初に蹂躪した地帯であつて、資本主義とは縁遠い、封建的色彩の強い地域である。

註 劉の地盤は今日彼の部下たる王陵基、王績緒、唐式遵、范紹增らに分かれています。

大体以上の四つの地盤に於て、第一の重慶を中心とする地帯に劉湘、次に経済の発展している第二の地帯、即ち揚子江の重慶から更に上流成都の方に到る地帯は元劉文輝の所領であり、彼は更に西の西康寄りの地域にも勢力を伸ばしていたのである。その他に第三の大きな軍閥として鄧錫侯があり、更に鄧錫侯の乾分に李其相、羅沢州、楊森の三人の軍閥が従つておつたのである。その他に田頌堯が居り、彼の地盤は最も一番遅れた地帯

であつた。これらの諸軍閥が劉湘と劉文輝を中心にして、猛烈な闘争を続け、結局第三の地位にあつた鄧錫侯は独立せる地位を保つことが困難となり、幾度かその部下との間に分裂を生じ遂に劉湘の勢力下に降り、結局国民政府は劉湘に四川省の全権を委ね、劉文輝は隣の西康省の建省委員長ということにして結末を付けたわけである。

四川の面積はほぼフランスと同じ位な地域で、人口は四川がフランスよりも四分の一だけ多く、しかも経済的には非常に発展の後れた段階にあるのであるから、農民の生活状態や富の程度などの低さは十分に想像されるのであろう。

四川軍閥の抗争の状態や結末は大体以上のようにあつたが、彼等が自己の割拠の勢力を維持し拡大する為にはどうしてもその支配する領域の住民に重税を課する結果を生ずる。そしてそれは単に農業の上に課せられるばかりでなく、手工業にも、或いはまた地方的の錢莊などにも十萬円の資本金のものに対して二十萬円の借入金を押付けるという状態であつた。勿論こういう場合にも軍閥治下の民衆は何等の保障を受けない。法律などは殆ど存在せず、生殺与奪の権はかかつて軍閥の手中にあるという状態である。しかも最近、これら軍閥の民衆に対する苛斂誅求に新しい要素を加えたのは、これ等の軍閥自身が新たな姿をもつて民衆に臨んだということである。即ち、以上の如き封建的色彩の濃厚な租税の徴収に加えて、土豪劣紳として新しい経済的利益追求に乗り出したのである。例えば前に挙げた鄧錫侯の部下の羅沢州の如きは大電燈会社の株主となり、又劉

湘や潘文華、唐式遵、王績緒等は何れも大石油会社の株主となり、新しい型の誅求を加えたのである。

これ等の軍閥の苛斂誅求のうち特に大なる地位を占めるのは四川省においては阿片に関する税である。これは単に四川省のみならず、北方においても見られたし、又雲南、江西、広東等にも見られたが、四川においては殊に阿片が重要な意味を帯びているのである。この阿片税は種々の複雑な形で課税せられ、先ず栽培を強制し、更にその製造税、これらの運搬税及び阿片吸飲税と言うように、幾多の段階において税を課するのである。つまり軍閥は自己の財政上の必要に基づいて阿片の栽培と吸飲を人民に強制するわけである。四川の一小学校長の報告によると、その小学校の男生徒五十人のうち四十人までは十歳の時に阿片の味を知り、また女生徒三十人の中の半数はやはり同様の経験をもつと述べている。また一九三二、三年の頃に紅軍（共産軍）の徐向前軍が湖北、安徽、河南省境方面から四川に移動して来た際も四川の軍閥はそれを防衛するという名目によつて一層激しい苛斂誅求を加えた。前に挙げた如き小軍閥の中の一人の領地の農民などは五十年先の税金まで取上げられているという状態で、甚だしいのは六十年先ないしは七十年先の四回に分つて、しかもそれを段々殖やして行く。回数が多くなると人氣が無くなるので一回の取り分を引上げて来ると言つたような方法でますます重圧を加えておつた。

軍閥の民衆に対する関係は以上の如くであるが、これに対して共産軍は、かかる性質の封建軍閥の立つ社会的経済的基礎を

のものを清算するという方針をとった。殊に土地問題については、土地の小作關係を現わす地券を焼き払うとか、土地の均分を行うとか、地方的な土豪劣紳を処罰するとか、こういう手段に訴えたのであるから、四川軍閥制度は共產軍の爲に途を拓いてやるような作用をなしておったとも言える。

一方においては内部のこうした苛斂誅求によつて人民は疲弊し、他方に於ては全く對蹠的な共產軍の力が外部から加わり、更に大なる資本と支配力をもつ蒋介石の國民政府の勢力が浸透して来たために、一応独立した地盤を維持していた四川軍閥も遂に蔣政權の統一工作の前に屈伏する結果になつたのである。

四川の如き奥地に隔絶した地域においても外国資本の侵入は既に顯著であつた。元來四川は雲南の經營に一応の成功を収めたフランスが多年目指す目標であつた。楊子江の制覇を終えたイギリス資本もまた上流の四川を勢力下に置くことを多年待望していたのである。四川、西康は西藏、ビルマに連なることはいうまでもない。

一九三四年夏、突如として四川の対英五千万円借款計画が暴露された。これは省主席劉湘が四川の聚興誠銀行經理楊傑三なるものをロンドンに派し、イギリスの德善公司を相手として四川省の鉱山、鐵道を抵当として五萬元の借款を締結せんとしたもので、これは帰任に先立つて四川に旅行した当時の駐支公使マイルス・ランプトンの斡旋によるものであるといわれた。この借款計画は俄然「國權の喪失、イギリスの經濟侵略」として驚々の非難を浴び遂に成立を見ずに終つた。

以上は支那封建社會の縮図たる四川の軍閥について、しかも主として經濟的方面について述べたのであるが、この四川のみならず支那全体が一つの軍閥政治であるといふことは民国以來の状態を顧みると忽ち明瞭となるのである。李濟州は「南京政府の政績」に於て北京政府時代と南京政府時代とを較べて、南京政府時代が決して軍閥的な形を清算しきつておらず、寧ろ一層規模を拡大した軍閥政治であつたといふことを論じているが、その説明によると、蒋介石が南京に勢力を充実してから更に十二の内戦が行われている。民国元年から十七年までの十六年間の北京政府時代と、民国十七年から民国二十三年、即ち一九二八年から一九三四年までの六年間とを較べて見ると、北京時代には内戦の回数が十一回、南京政府になつてからは更に十二回の多きに及んでいる。北京政府時代には毎年平均一回にならなかつたが、南京政府時代になつてからは毎年平均二回は繰返されている。また内戦延日数を政府の統治日数に比較すると、北京時代には七分一厘であるのに対し、南京政府時代になつてからは内戦の継続期間が統治期間を超過している。したがつて國民政府の発行した公債は北京政府時代に比べて莫大な額に達したのである。北京政府の発行した内債は六億元であつたが、南京政府は一九二七—三四年間に十三億元にも達した。

また國民政府の財政についてみても、軍事實が非常に額に上つたといわれる北京時代（一九一七年）には政務費と軍務費との割合が、政務費の方は三割五分七厘であり、軍務費の方は六割四分三厘であつたが、南京政府の時代の一九三一年、最も内

乱の頻繁な時期の最後の年であるが、実に政務費の七分七厘八毛に対して、軍務費は九割二分二厘二毛という割合を示した。「國民政府の南京政府は軍費の支出が政費の支出の十倍になつて居り、あらゆる収入を総て國家と人民とを害する内戦の費用に供した」觀があつた。

これはしかし觀点を変えていへばこれは國民政府が半封建的な時代を清算する爲のひたむきな努力を続けた爲に起つた現象であり、これを「軍閥混戦」と呼ぶのは誤りであるといふ弁解も一応成り立つのである。

しかしながら問題の本質は更に深いところにある。吾々が長い數千年の支那の歴史の中を通じて見た如き停滞的狀態を示した支那社會の裡に深い根があるのである。國民政府の本質は別としても國民政府の短かい時間の努力を以てしては到底これに代わかに解決することが出来ない状態にあつたわけである。

更に我々は國民政府の本質について考えて見る必要がある。試みに現在國民政府の重要な地位にある全國各省の主席について見るに、勿論この各省の主席というものもその性質は必ずしも均質ではなくして所謂封建的ないし半封建的の官僚・軍閥なりとはいへないが、たとえ財閥出身者なりとしても一度現在の地方社會の上に置かれれば一様に封建的の官僚化せざるを得ない現状にあるのである。

現在の支那の中でこの日支事變の始まる前に軍人出身でなかつたのは、安徽省の劉峙、山西省の趙戴文（彼もかつて陸軍中將であつた）、江蘇省の陳果夫、浙江省の朱家驊、広東省の

吳鐵城彼と雖もかつて警衛指令、師長をつとめたことはある）といふ數人だけであつた。しかるにこの事件が始まつてからは、浙江財閥出身の財政家であつて、前の実業部長であつた吳鼎昌がただ一人貴州省の主席として残つただけであつた。しかも一九三九年の初には吳鼎昌も貴州省の主席を去つたのであるから、悉く軍人の手によつて地方の行政長官たる省主席の地位が占められたわけである。これは勿論戰時情勢下であるとは言へ、支那の中央・地方的政治機構が軍閥政治の存続の基礎を持つて居る証拠であらうと思われる。

最後に、この軍閥が最近の支那政治においていかなる経路を辿つたかを見るに、軍閥は支那の國民統一の過程が進むに及んでも、尚かつ地方的な割拠勢力として存在し、しかも新たなる現象としては單なる封建的な軍閥の形態に止らず、一種の割拠的封鎖經濟を行うところの地方的な割拠勢力に變形して居たのである。それは、特に滿洲事變以後、支那における金融恐慌の深化して一三五年までの間において最も顯著であつた。例えば、広東には陳濟棠という所謂広東軍閥の巨頭があり、一九二六年の夏に西南事件で失脚するまでは數年に亘つて広東の主のような權力を揮つて居たのである。一九三一年以來は広東は南京の蒋介石政府に対して、一敵國を形成し半獨立の狀態を示していたのである。汪精衛などもかつて胡漢民等と共にこの広東の軍閥の地盤に拠つて広東「國民政府」を作つた。

註 一九三一年五月、広東に國民政府を樹立、唐紹儀、古安岑、孫科、都魯、汪精衛が常務委員であつた。

西省と浙江財閥（広義の）との間には経済戦が行われていた。山西省は毎年数百万元の輸入超過となっていたので山西銀行券は輸入期になるとこれを確保に反映して減価し閻錫山を悩ました。一方山西の行方税制（塩税、関税）上の封鎖政策は、南京財政に障害を与え、また山西の省管工場の商品（マツタの如きその一例である）は、天津市場に現われて浙江系資本に脅威を与えた。

これらにも況して重要な障害の条件は第四の共産党政策の影響である。陝西を新たな中心地盤とした共産軍は一九三六年春大挙して山西省内に侵入し呂梁山脈地帯を中心に席捲したのであるが、この軍事的打撃以上に山西王国を動揺せしめたものは農村問題であり、土地問題であった。封建的搾取の上に築かれた山西王国の支配は根底から脅かされたのである。閻錫山が「土地村有制」の怪しげな改良主義的意見を發表せざるを得なかったのは全くかかる理由からであった。

以上の諸例のような封建的、完全に近い半独立的体制の場合とは異なるが、北支に存在した冀察（河北・察哈爾）政務委員會の性質も、宋哲元を主席とする二十九軍軍閥の将領が蔣介石に対して占める關係では一個の自立的政權であった。その他、前述の四川の如きも同様である。四川における劉湘初め難多小軍閥は互いに内部的抗争を行いながら、四川全体としては統一支那に対して一つの独立的封鎖経済を形造つて来ていたのである。

その他に山東省の韓復榘は、これも亦かなりの色濃き度合に

一種の自治体制を布いて山西王国の觀を成していたのである。彼はおくれた山西省の封建的經濟地盤の上に二十年にわたる「原始的蓄積」を行つて相当の実力を蓄えたが、柄になく政治的制覇を夢みて投機的政治家馮玉祥あたりと一塵し蔣介石に楯ついて見事失敗した。そこで再び山西の地盤によって自己の勢力を建て直そうとしたが、これが一九三三年以来行われた山西省建設十年計画である。彼はこれをもつて省内經濟の再組織に踏出しつつあったのである。

山西封鎖經濟の状況については閻錫山が力を注いだ省内縦貫鐵道たる同蒲鐵道がある。これは山西省の特産たる石炭の運搬において重要な役割をなすべき筈のものであるが、これは狹軌鐵道である。このへんにも国内他鐵道からの連絡を自ら切離そうとする閻錫山の努力が現われているといわれていた。山西には閻錫山直營の紡績工場であるとか、製粉工場であるとか、隣寸工場であるとかかなりな工場施設が行われていたことが、日本軍の山西占領によつて一層明らかにされたのである。

これらの經濟建設は途中で今次の大事件に遭遇して根本から吹き飛んでしまったのであるが実はこのことがなくても封鎖經濟を行ひ得ない条件にあつたと思われる。その理由としては山西省經濟の絶對的な貧しさを別としても、第一に、支那の民族運動の基本的線に添った蔣介石の国内統一のスローガンに押され、第二に浙江財閥の攻撃を受け、第三に外国資本の直接的資本的援助を得る可能性が減少したことをあげることが出来る。

この第三点は、明らかに第一、第二の点に関連している。山

西において自主的な地盤を作つていた。その他湖南省の何健、彼はこの事変を契機として蔣介石に警戒され、長年の軍閥的地盤たる湖南から引離されて内政部長という空位に置かれたのであるが、この何健の湖南省における地位も亦一種の半独立的なものであつた。彼も過去においてしばしば外国資本との間に、湖南の經濟開發に関する交渉を試みたのであつたが成功するに到らなかつた。

以上瞥見せる如く支那の軍閥は最近の段階に至るまで、統一に反対する遠心的な勢力として支那政治の中で極めて重要な地位を占め來つたのである。ところで興味ある事實は今次戦争の過程を通じて蔣介石は全力を挙げてこの封建的な軍閥の勢力を清算しようとする意識的に努めて來たことである。冀察政務委員會主席の宋哲元は日支の最初の衝突で一も二もなくその王座を降り、山西の閻錫山もまた山西の地盤を日本軍に追われて、山西の諸所を転々とし、最近ある外人記者は彼を陝西の或る地方の洞窟の司令部に訪ねて会見しているという有様である。韓復榘の末路に到つてはまことにあわれむべく、山東政戦の責任を問われて漢口で処刑されてしまった。四川省主席劉湘は戦争の初期以後兵隊を送り出したりして大いに努めていたが、原因不明の死を遂げてしまった。病氣ということになっているが支那人も一服盡られたのであると考えているものが多いようである。眞偽のほどは分らぬとしても、四川の地盤を中共化するためには劉湘を片づけて地均しをすることは必要な手段であつたらう。広西省の李宗仁、白崇禧の徒も今次の事変に於ては最初から日

本軍に対して悪戦苦闘に立たされている。彼等は元來中央派とは対立關係にあり、或る意味に於て最も日本軍を理解するの評もあり、種々の噂を生んだのであるが、しかし今日までの経過に於ては完全に「抗日英雄」になりきっている。これは大げさに言えば、たしかに「世界史の皮肉」と見ることも出来るのである。広西は今日で二十五万の壮丁を前線に送ったといわれているが、既にその半を喪つて、主力は李宗仁に率いられて漢水上流方面にあり、一部は廖耀の下に安徽方面にあるといわれ、自崇禧は軍隊と離れて中央の軍事指導部に孤立し、いずれも広西の地盤を遊離してしまつたと見るべきである。

この結果は確かに蒋介石側の方策に出ていると言へべきである。広東の軍閥は陳濟棠の後を受け継いだ余漢謀が日本の広東進撃以來、広東の經濟的地盤を離れて日本軍と対峙し広東市に再び入る目を夢想しているという状態である。以上見た如く支那の軍閥の巨頭はかなりな程度で逐次清算されつつあるのであるが、これらの極めて根深い支那社会の根本的な性格に基づいて存在する軍閥が、決して一朝一夕に清算される筈のものでないことはいうまでもない。そしてこれらは今後軍閥、或いは軍閥的な勢力として相当の政治的作用を営むであろうことはほぼ想像されるのである。

土匪は近代の軍閥の持つような政治的意味を現代支那社会に営むものではないが、しかしその存在の社会的經濟的基礎にいたつてはほぼ同様であるといえる。選れた支那社会の地盤の上に生じたものであつて、それは支那の農業社会に直接の根を下

しているのである。軍閥と土匪とは明らかに相互の連関をもっている。まず土匪は軍閥の直接の所産である。というのは、軍閥の苛斂誅求は農村を疲弊させ、農村から多くの人間が遊離する。しかもこれには支那社会に絶えず襲いかかっている天災であるとか飢饉であるとかの諸原因が加わり、更に軍閥の間の戦争によつて、戦争に敗けた軍隊は離散してこれが土匪になる原因を作っているのである。つまり農村の地盤を遊離した流氓で弱い者は乞食になったり軍閥の手兵となる。支那では昔から「好鉄不打釘、好人不当兵」といつて、兵隊になることを好まなかつた根拠はこれらの理由によるのである。兵隊になれば一月八元とか十元とかの月給にありつけるのである。もう少し意気地を持つていて勇氣のある連中は土匪になつて綠林の帝王を夢みることになるといつた真合である。そしてつまり行けば匪の集団はやがて地方的な勢力になる可能性も無いとはいへない。もとの東三省王たる張作霖が綠林出身であつたことは有名である。現存の支那軍閥中には流石に土匪出身は余りないようであるが、前身を洗つて見ればあやしげなものがあると思われる。この点では身を卒伍に起した先の韓復榘の如きは同じく立身派であつてもやや系統が正しいということになる。要するに土匪は結局軍閥の地盤に直接密着しているのである。その証拠には土匪が一番多い山東、河南、安徽の北部、湖北の北部、四川、広東等の諸地域は最も封建的な色彩の強い、軍閥の割拠する地域であるということに見ても明らかであらうと思ふ。土匪は民国以後の混乱に乗じて発生し、多い時には全国で百万に及んだと

いわれた。或る人は更にそれを多く見て二百万という數を挙げている。彼等の思潮は大体において均産主義的である。この点は極めて注目すべき点で、彼等は官僚とか官吏に対しては殊に強い反感を持つてゐる。従つて官僚と同一の基礎に立つ地方の地主などに対しても反感を持ち、これらを攻撃の對象として暴れ廻るのである。均産というのは財産の平均を言うのであるがもとよりそれは何等深い主義に基づいたものではなく、彼等の極めて卑近な要求に過ぎないのである。しかしながらこの自然の要求は土匪群の共産主義への流れ込みを可能ならしめた根拠でもあらうと思われる。紅軍が最初に湖南、江西省境地方に抛つていた頃にはこの地方の土匪の合流が見られた。土匪が山東省あたりでいかに跳梁したかという例は、或る年において山東省の土匪が要求した身代金が丁度山東省の税金と同額だつたという事案を見ても窺われることである。

土匪と共通の封建的な地盤に育つた者の中で土匪に対する抵抗勢力として発達したものに、地方に在る紅槍会であるとか、大刀会であるとか、小刀会であるとか、或いは天門会という如きものがある。これは一種の地方農村、都市の自衛団体である。これらの多くは大体宗教的な色彩の濃厚なものである。支那における地方の治安は警察制度が極めて不完全であるため、結局地方民自身が自衛しなければならぬという必要が存在する。この要求に基づいて生れたのがこれらの自衛武裝団体である。しかしながらその多くは自らも土匪的な行為を行い、結局土匪となる場合も少なくないのである。紅槍は槍に紅い房を付けてい

る団体であるから紅槍会と言ひ、大刀会は青竜刀の大きいのを持つてゐるから大刀会という工合に命名されていることは周知の如くであるが、迷信との結びつきが多く彼等の行動を勇敢にしている。例えば出陣に際して片手に策、片手で大きな団扇を持つてゐるのがあるが、これは弾が来ても団扇であおくと弾が爪の中に落ちて入つてしまふと真面目に信じこんでゐるからである。また満洲などで匪賊討伐軍がしばしば遭遇した実例であるが、機關銃の掃射の前に紅い房を擧げて後から後から突撃して来る。少しも恐れを知らぬ観があるのに驚かされて、捕虜にきいて見ると、彼等は絶対に弾に中らぬという信念を持つてゐるのである。もしも導師の言う所に従つて完全なる信仰を持つていれば、決して弾が中るものではない、弾に中に一層都合の好いことには、一度死んでもこの信念を堅持すれば必ずまた生き返つて来ると信じこまされてゐるのである。まさに後れた支那社会の封建的地盤の上に発生した産物といわねばならない。

秘密結社

支那歴史の区分の場合に見た歴史の一つの段階から次の段階への移り変りに大きな役割を演じた農民の一揆ないし暴動は、大体において秘密結社を土台として政治的に振がり、盛り上つた運動であるが、かかる秘密結社の発生とその存続の根拠は支那社会の立ち遅れと関連するものであることは問題なきところ

である。

宗教的神秘が結社の温床たることはこの国でも同様であるが、支那社会においては仏教及び道教がその発達の基礎であった。支那の秘密結社の研究家である一外人は、(一)人口過剰、(二)通信手段の欠如、(三)絶えざる疫病、自然的災害、内乱の発生等、が秘密結社発生の条件であると述べている。これは寧ろ結社の目的とする革命の原因と見るべきであろう。革命に対する準備行動たる結社運動を助長したものは、その「天命」或いは「革命」に対する觀念にあると思われる。

宋代の終りに発生した白蓮教は、排外的団体として発達したものであつて、後に一八九七年山東でドイツの宣教師を殺したのもこの流れを汲む連中であつた。団匪事件の主動力をなしたのはこの連中であつた。彼等は滿洲朝廷に対する滅滿興漢の運動には極めて熱心に参加したのであつた。勿論この種の結社運動は大きな政治運動に展開する条件を備えたものとはいへない。それは結社そのものの封建的な性質によつて制約されていると見る事が出来るであろう。

国民党自身もまた多くの支那の革命運動の母体がさうであつたように、秘密結社から出発している。孫文の国民党の前身である興中会或いは中国同盟会の如きは、明らかに一種の秘密結社であつた。これらの前期の運動においては後を引いている哥老会であるとか三合会と言つたような秘密結社が国民党の前身の中に入り込んで相当な役割をしている。支那の一学生の自伝をロシアの作家トレチャコフの纏めた『鄧懋華』という本の中

に四川の田舎の村の生活が書かれているが、その中に革命党員を擧げるこれ等の秘密結社の活動が面白く現わされている。

註 五四運動当時北京に居た学生の記録であるが、その牛ひららの部分に郷里の極めて封建的な農村の状態が描かれている。

白蓮教の流れを汲むものに国民党支配の支柱をなしている「青帮」なるものがある。この秘密結社はどうして発達したかと言へば、元來江南の米とかその他の貨物を北京朝廷へ運んで行く場合には大運河に沿つて持つて行くわけであるが、その途中の山東であるとか、安徽であるとか、江蘇省の北部であるとかの最も土匪の跳梁する地帯を通つて行く必要があり、それを防衛する為には青帮がその役割を引受けて次第に勢力を得たのであるといわれている。その後太平天国の乱の時に曾国藩の幕下に青帮の一部が参加したといつたのでまた勢力を拡大した。

註 太平天国自体もまた楊秀清、洪秀全等の多分に宗教的色彩を帯びた土着会を中心とする結社運動を基礎として発展したものである。

その後揚子江及び運河沿いに勢力をもつていたのであるが、殊に上海のフランス租界を中心とする阿片の利権であるとか賭博場であるとか、その他暗黒街に根を張るに到つた。

青帮は国民政府確立以後非常に勢力をもつに到り、南京政府と或る種の密接な關係を結ぶこととなつた。これは封建的諸關係を清算しきれない国民政府の政府遂行手段としてこれらの地下的な組織が必要であつたからでもある。一九二七年四月、蒋介石が左翼労働組合を弾圧した際には青帮は顯著な動きを示したといわれている。その後においても上海の租界、共同租界に

現代支那の特長的諸様相

おける公共機関の罷業の場合、青帮は多くこれを弾圧するため一種の仲介役をつとめているのである。

青帮の組織は中国共産党の中にまでも持ちこまれており、かつて一九三一年頃南京政府に寝返つて、当時の共産党の総書記向忠発以下を捕えしめ、共産党に大打撃を与えた共産党の特務隊の責任者、顧順章は青帮の相当の親分であるといつたことが当時もつぱら消息通の間に噂された。彼の青帮としての勢力が共産党の秘密なる会場の選定、警戒、情報の蒐集等に頗る便利だつたためであるといわれていた。支那社会の特殊性はこの近代的な地下的な共産党組織の中にすら持ちこまれていたといつたことは興味ある事実であろう。

南京政府の指導部にある浙江財閥の巨頭の中には青帮の相当な親分がいる。日本人の間には比較的よく知られている三北汽船の社長虞和徳(哈卿)は青帮のかなりの親分である。蒋介石自身も青帮の組織の中の相当な地位に立っているとの説も専ら行われていたが、これは寧ろ彼が上海で昔、陳其美の下でぶらぶらしていた頃の關係によつて青帮との交渉があるだけと見てよからう。青帮の親分張耀林、黄金榮或いは有名な杜月笙などという連中はこの結社の大親分であると同時に、フランス租界工部局の支那人委員であり、かつ本来浙江財閥の有力な分子で、杜月笙の如きは銀行の幾つかに重役として關係し、国民政府系銀行の重要な椅子を占めておる状態である。

註 本名杜鍾 陸海空軍總司令部參議 中運銀行董事、招商局常務理

事、中国銀行董事等の要職にあつた。

その他純粋なる政治的結社として有名なのは蒋介石の親衛隊を成している藍衣社がある。これは青帮と非常に近い性質のものであつて、蒋介石を推戴し、黄埔軍官学校出身の軍人を以て中心とした団体で厳密な秘密結社である。これは抗日運動には相当大きな暗躍をなした。

その他CC団と呼ばれ、蒋介石の側近に在る陳果夫、陳立夫兄弟を首領とする政治的な秘密結社がある。

このCC団の名前の源は、陳果夫、陳立夫の両方とも陳で頭文字がCだから、CC団と言ふとの説もあるが、上海にこの連中が作ったセントラル・クラブの頭文字を取つたといふのが眞実に近いと思われる。これもまた秘密結社であり、現在の政治の段階において相当有力な共産党の敵であつたが、国民党の言論及び教育の監督權はこの派が掌握するところで多くの定期刊行物がこの派によつて出されている。戦争開始以來、CC団の支那政權の中に占める役割は注視されて來た。この派は国共合作反対派、ないし和平派の色彩ありといわれている。要するにこれ等の団体、結社は支那社会の極めて特異な本来的な性格に沿つたものであるといふことが出来るのである。

買弁・浙江財閥

次に支那社会の特質たる半封建性、半殖民地性と関連して述べて置く必要があるのは買弁である。元來支那の商業資本は極めて長い歴史を有するにもかかわらず、ヨーロッパに於て示さ

れた如き発展、即ち産業資本への転化を見ることなくして、先進国たる外国資本の支那進出を迎えなければならなかった。支那の商業資本はヨーロッパの商業資本が封建性社会から資本主義社会への発展に際して果たした如き役割を遂行することなく、一方に於ては封建的巨入支配に從属的關係に於て結びつき、他方に於てその貨幣蓄積を生産部門に生かすことなく、封建的的地位を取得するための土地購入、或いは農民に対する高利貸付に投じ、かくして支那の商業資本は封建的農民の経済生活を破滅せしめるのみで、封建的体制そのものを崩壊せしめず、寧ろそれに依存し寄生していたのである。

こうした商業資本が先進国たる外国の資本的勢力と接觸する場合、何ら本質的対立もなく、外国資本の支那進出に寄生從属し、外国資本と支那の経済社会の仲介者としての役割を帯びるに至るのは当然である。買弁の役割はこの列国の勢力と支那の経済社会を結びつけ、その仲介者となるところにある。

最初外国資本主義に内在する要求に従い、市場を求めて支那に姿を現わした時、清朝の海外主義は徹底したものであった。そして外国商人の貿易を許可するためにわずかに少数の仲介商人を選んだのが買弁の最初である。イギリスが広東に来た時には、ここに十三人の特定商人の組織する「公行」(Cohong)が設けられ通商はこの独占的組織を通じてのみ許可された。

註 この制度はイギリス側にとっては望ましいものではなかった。従つて南京条約の締結この制度は廢せられたのである。買弁はこれ以後、外国への完全なる依存性のもとに発達したのである。

他方外国側としても、支那の内部的事情はもとより言葉すら通せぬという状況の下では何よりも先ず支那進出の先導者として買弁を必要としたのである。買弁の役割は列国が巨大な超過利潤を支那から吸い上げる吸上口の口金たるところにあり、その分け前に与つて、支那の貿易の発展に伴つて支那社会に於いて特別なる重要な地位を占めるに至つた。しかしかかる性質の買弁それ自身が独自の積極的な商業活動ないし産業活動に入るには、極めて制約された状態にあることは、その外国資本への從属性より見て明瞭である。しかも支那の商業、貿易は今日までこの買弁の性質を明瞭に残してゐるのである。外国経営の大会社即ち日本の三井、三菱とかイギリスのシャードン・マヂソンの如き大会社には必ず大買弁が存在する。私は去年の冬香港滞在中に、イギリス政府からサーの称号を買つているシャードン・マヂソンの大買弁の五十年かの勳章祝賀会が盛大に行われたのを見て、流石にイギリスのコンブラドールなどになると酒のついたものであると種々考えさせられたのであったが、こう言う大規模の会社の他、一般の商社並に銀行、汽船会社、保險会社等にもそれぞれ買弁がいるのである。更にまた一般の支那商人も外国品を多く扱うのであるから、これら外国商品を取り商人或いは外国資本のために支那商品を買集める商人は或る意味に於て買弁の性質を帯びているわけである。

支那の経済界において極めて重要な地位を占め、或る場合において南京政府を支配する力をもつと言われた浙江財閥の如

きも本来買弁的性質が非常に濃厚であり、買弁的活動によつて巨額の資財を得て彼等の勢力を確立し、自分達の土着産業資本としての勢力をもそれに依つて増大して行つたのであった。浙江財閥最高の地位にある宋子文或いは孔祥熙等の如き大銀行家においても多分にこの買弁的性質を残している。これは南京政府の外国金融資本への隷属という面に起つて來ている彼等の特別の地位を説明するものである。

この際浙江財閥について一言すれば、浙江財閥なる言葉は日本人の間に通りがいい呼び方で上海を中心として国民党支那の中核をなすものが、多く浙江系の人物であつたために命名したのである。或いは江蘇とともにこれを浙江財閥と呼び、また支那では華東財閥と稱するものがある。浙江財閥の名は必ずしも内容的に明確なものではなく、次のような三つの場合がある。

- 一、浙江省出身にして主として上海に本拠を有する金融業者及び実業家の總稱。
 - 二、主として上海に本拠を有する江、浙両省出身の金融業者並びに実業家の總稱。
 - 三、その出身地が浙江なると広東なると江蘇なると両者たるもの論なく、およそ上海を本拠として活動する金融業者、実業家は勿論、財界・政界の有力者をも悉く総括して稱する。——このグループの中心勢力をなすものが浙江出身の政・財界有力者たることは言うまでもない。
- これによつても知られるように、初めは資本集積の初歩的な資本家の地縁的集團に着用したものであつて、この資本の大体

は封建的な支那社会末期に集積された官僚資本及び買弁資本である。随つて浙江財閥資本の中心をなすものは、銀行資本である。その後南京政府との結びつきによつて（主として内債引受の財政過程に参加することによつて）殆ど両者の縫合纏着状態にまで進むに至り、支那に於ける新興民族資本の全体を包括するまでに発展を遂げた。この意味で浙江財閥は最後には支那に於ける新興民族資本そのものであるという風に見られるに至つた。一九三五年以來南京政府の銀行統制、幣制改革によつて浙江財閥内部にも編成替えが行われ、金融中心勢力の強化を中心に、質的な転換を見つゝあつた。浙江財閥は上海を中心として支那の金融機關の全体を壟断し、支那のあらゆる産業に支配の触手を伸べていたばかりか、銀行はその過剰遊休資本をもつて農村の合作社を通じ農村流通機構をもその独占支配下に置くとともに、國際資本との提携に依つて経済建設（經濟開発）にも乗り出しつゝあつた。つまりこの場合においてもその買弁資本たる性質は保存され、寧ろその性質の新たな發展展開が見られたのである。浙江財閥の支配網としては次の如きものが数えられた。

- 一、銀行金融業（中央、交通、四明、浙江興業、中国通商、浙江実業、中国銀行、江蘇銀行、上海商業儲蓄銀行、塘業銀行、金城銀行、中国農工銀行、大陸銀行、國華銀行、中央信託公司及上海錢莊業者の大半。
- 二、取引所（交易所）、華商紗布、華商証券、雜糧、油餅の各交易所。
- 三、通關業、これは全部浙江人である。

- 四、航運業（招商局・三北・寧招・滬安・恆安・文記等の各輪船公司）。
- 五、石炭業。
- 六、機械工業（上海中心の各種機械工業及びその輸入業者、取扱商の大半）。
- 七、紡織業（新申・華豐・振泰・崇新等の各紡織業者）。
- 八、綿布・綿糸・棉花業（上海各業者の大半）。
- 九、綢緞業（主要なる上海の当業者全部）。
- 十、製糸業（上海、鎮江、無錫等製糸業者全部）。
- 十一、雜工業（上海中心の製粉・顔料・製罐・人參・精糖の各種工業家の大部分）。

浙江財閥の中心人物には次の如きものがある。

- 李鶴孫（李銘、浙江美業銀行）、徐寄廬（浙江興業銀行）徐新六（浙江興業銀行、事変中広東附近で飛行中誤つて日本軍に射たれ死亡）、張公權（交通部長）、錢永銘（交通銀行四行準備庫）、秦潤卿（中央銀行）、吳鼎昌（元美業部長、前貴州省主席）、陳光甫（四明・中国・中央銀行）、虞洽卿（三北汽船）、朱宗敬（申新紡）、杜月笙（中滙銀行）。

しかして南京政府財政と結びつき、質的転換を遂げつつあった浙江財閥の中心人物は朱子文（広東出身、中国銀行董事長、前財政部長）及び孔祥熙（山西出身、行政院長兼財政部長）である。蒋介石をも含むこの閥門の一族は、浙江財閥中の王座を占めるものであらう。

註 浙江財閥の研究には、山上金勇氏の浙江財閥論（昭和十三年版）

がある。

支那と列強資本

支那社会の一特徴をなす半植民地性は、前述の如く社会発展の極めて停滞せる、低段階にある支那社会と、高度に發展した経済力を持つ資本主義先進国の勢力との接合点に起つた現象と解せられるのであつて、それが今日における支那社会の生きた特質として吾々の目の前に展開されており、しかも直ちにこの特質が支那と取組んでいる我々の前に現実の問題として極度に重大な課題を投げているという意味に於て、この問題の究明は具体的になされなければならないのである。

列国の対支活動は大体次の五時期に區別することができる。

第一は阿片戦争より日清戦争に至る時期である。阿片戦争は周知の通り極めて重要な歴史的意義を持つてゐるが、この一八四〇年に起つて、四二年に終つた阿片戦争の結果締結された南京条約は、列国の資本が本格的に支那市場に入り込む途を開いたものと言えよう。従来の支那は膨大な国土を閉鎖して、外界より迫るあらゆる勢力を排撃して来たのであつた。支那歴史は現実に支那が、所謂夷夷、西域、南蛮、北狄と称んだ外部勢力にしばしば征服されたことを示したが、とにかく概念的には全部これを拒否した事実拒否しようとして来たのである。結局

に於て従来とは異なり、支那社会よりも高い發展段階にある先進資本主義の力を拒否し得ず、これ等の列国資本の導入口を開いたのが一八四二年の南京条約であつた。阿片戦争は支那に毒物の阿片を強制的に売付けんとしたイギリスを、支那が拒否した事を直後の契機として起つたのであるが、イギリスが何故に阿片を支那に持ち込まなければならなかつたかと言えば、イギリスはその片貿易を調整するためと、十八世紀以来東印度会社によつてインドに大規模に栽培されていた阿片の販路を支那に開拓するといふ二重の必要に基づいてゐた。一八四二年の南京条約に續いたのは一八五六年の天津条約である。これはイギリスがフランスと共同軍事行動によつて武力的に締結した条約であつた。これはやがて一八七六年の芝罘条約によつて拡大され、支那の対外的地位を制約する基礎とも言うべき所謂不平等条約の根がここに完全に構築されたのである。領事裁判権、關稅上の權利、内河、沿岸の航行權などがこれによつて規定され、列国資本はこれらの特權的諸關係を利用して支那全土に勢力を滲透せしめる基礎をきずいたのである。要するに、この期間は列国が武力或いは威嚇手段に依つて、甚しい場合には一種の詐術を以て支那より特權を獲得した時代であるといふことが出来る。

第二の時期は、日清戦争より北清事変に至る時期である。この時期は日清戦争に依つて所謂「眠れる獅子」として伝統的に恐れられていた専制主義的清朝の支那が、実は眠つてゐるのではなくして、少くとも腰が立たない位に病氣であるといふことが明らかとなり、列国が争つて支那に要求を突きつけた時代で

支那の変貌

新支那と抗日支那

去年の暮、大規模な戦争の一段落を告げた時を標準として占領地区と非占領地区とを比較して見ると極めて表面的、概括的に言つて次のようになる。

	面積 (千平方呎)	人口 (百万人)	耕地面積 (百万公畝)	公路 (街)
占領地域	一、四七	一、五五	三、六三	四、六六
非占領地域	三、三三	三、一九	二、七五	三、六六

	鉄道 (千)	国内貿易 (百万元)	外国貿易 (百万元)	紡織機数 (千機)	製粉工業 (袋)
占領地域	一、三三	一、三三	一、三三	四、七五	四、七五
非占領地域	四、〇〇	四、〇〇	四、〇〇	一、三三	一、三三

この他に、北中南支における豊富なる地下資源、財政収入の源泉たるべき關稅、塩稅、統稅等に関しても両者の比較は十分占領地域の優越を示している。

ここに支那国民経済の変質の問題が具体的に起つて来るので

ある。

それは支那社会の基礎に何等かの變動を齎す条件となるであらう。勿論軍事的占領はそれだけでは単に一応の機械的な分離にし過ぎないのである。しかしながら、その根底には戦争による大規模なる生産機構の破壊が存在しているのである。この基礎条件の上に以上の如き経済的内容を持った地域が切り離され、更にこれに対して日本の大陸經營方式がこれと結びあつて着々進んだのである。支那經濟の変質は、前述の経済的領域と日本資本の直接的な結び付き方の中に一つは求められるであらう。

去年三月における中国連合準備銀行の設立、十一月創立にかかる資本金三億五千万円の北支開發、同月創立された資本金一億円の中支那振興会社等の役割はこの問題に就いてまことに重要な意味を帯びる。事変以来占領地域に進出した邦人資本は、或いは新規事業の創設の形で、或いはまた従来事業の拡張の形で、或いはまた既存支那人企業との結び付きの形（中には没収、強制、管理、委託經營、買収等種々の内容が含まれている）に於て進出が試みられた。

この際、土着資本の参加、協力の割合は未だ甚だ少いようである。

既にこれらの地域に深く入りこんだ列強資本の關係は表面の支那的社会經濟の構造が洗い去られ、破壊された後に、表面に露出した。これに伴うて経済的利益の損傷された部分も決して少くはないが、それだけに列強の利益保持のための努力は真剣

とならざるを得ず、従つて事変以来しばしば日本に対する憤懣を呼び抗議を行つたことは我々の見た如くである。

日本資本の大膽進出は純粹に経済的な形をとつてはいないのである。寧ろ政治的、国防的観点から重要な側面をなすものである。

一昨年十一月二十二日蒙疆連合委員會の成立、十二月十四日西安陥落の翌日北支における臨時政府の誕生、次いで昨年三月二十八日における中支の維新政府の誕生、更にその後広東、漢口占領に伴う新たな政治的権力の萌芽的な形成がこれらの地域にも見られるにいたつた。

これらの政治的権力は、強力に奥地に切り離された支那の領域に新たな社会經濟的関係を組織せんとしつゝあるのである。この側からする努力が旧支那社会のもつ本質なり特性なりをいかに変質せしめるかの問題は重要である。日本の所謂大陸經營の成功と否とは、観点を異にして見れば結局これにかかっていると云わねばならないのである。

旧支那社会經濟的變質の問題は奥地の側に於ても行われつつある。

その變質過程は、蔣政権の西南及び西北開發の進行の中に含まれている。西北については殆ど問題でないとしても西南支那の開發は實に抗日支那の今後の抗戰繼續能力そのものと直接關係をもつていのである。西南開發の中枢機關は「西南經濟建設委員會」であり、更に「西南經濟調整委員會」がある。武漢陥落以後蔣政権の西南開發のプランは中心の重要問題として取

り上げられている。いふまでもなくこれらの計画は非常時下において軍事的、統制的色彩が強いのである。

国民政府の西南建設の根幹は運輸交通である。湘桂鐵路（衡州—桂林）の完成を始め、湘黔鐵路、川滇鐵路、桂黔鐵路の着工又は工事の進捗が伝えられている。滇緬鐵路もまた昆明—大理間が着工された。西南公路網も著しい進捗を見た。

抗日政権が奥地に偏在するにいたつたことは、支那社会經濟の上に顕著なる効果を与える結果となつたという事実はしばしば外支人によって言われることである。元來支那の経済的發達は海沿經濟領域に外国資本との接觸下にもたらされたものであつた。従つて現在の西南或いは西北地区の如きは経済的發達においておくれた領域であつたのである。それが、道路交通の發達、並びに工場と奥地移転、鋳業、貿易の開發等の要求にもつづいて経済的發達が見られるにいたつたことは特筆すべきであるとなすのである。現在かかる西南地區の開發の實績がどれだけの評価を受くべきかは疑問の点が少くないとしても、何程かの經濟建設が行われつつあることは事實である。

ここに新たな問題を提供しつゝあることはこれらの西南開發が、外国資本特に英仏資本との密接なる結び付きをもつて行われていることである。これは英仏勢力の導入を必然的な結果としていふことはいふまでもないところである。この点は將來支那社会經濟變質の場合に大きな問題を残すこととなるであらう。

西南地域を中心とする抗日政権が、西南重慶の地盤に切り崩

し作用をもつて喰い込みつつあることは先にも一言した如くである。従つてこれら日勢力側からする反撥もまた或る程度現われていることは当然であらう。

これらの事実よりも更に注目すべき問題は抗戦支那の基本的戦術である遊撃戦である。

支那側が最後の願みとするこのゲリラ戦なるものは単に戦闘行為のみが重要なのではなく、農村社会における新たなる組織を伴うものであることはいうまでもない。これが支那社会経済に対して何等かの変化を齎すべき影響を持つものであることは事実であらう。

東亜の新秩序

現代支那の抗日政権の現状は前述の如くである。これに対して所謂新支那の面が対抗的勢力として抬頭しつつあるのである。問題を終局的に決定するものはこの新政権がいかん急遽に発展するかという点である。問題は支那の持つ民族問題をこの新しい政権が自己の問題として根本的に処理し得るまでに発展するならば、これこそは当面の問題としては支那問題の解決方式を提供することとなるのである。それはまた当然根本的には支那社会のもつ本質的な矛盾、その歴史的な停滞性の解決を意味する性質のものでなければならぬ。蓋し支那の民族運動の発展は日本の圧力を感じて暴状なる緊張を示したが、それはいわば外的要因であつて、内部的には封建的な桎梏を脱しようとする強い要求を本来持つていたためである。

段によつては容易に出来るものでなく、それはまた賢明な方式でもないであらう。

東亜における新秩序は真に支那の民族的協力を要請する如きものでなければならぬ。現在新秩序の内容として東亜協同体論或いは東亜連盟論の如き主張が提示されている。これは一つの提案として十分尊重に値することである。就中、東亜協同体論に現れた理想的な面は注目に値する。かかる考えを日本が持ち得ることは将来に対して一つの希望を与えるものということが出来るであらう。東亜協同体論或いは東亜連盟論についての紹介或いは論評は既に幾度かこれを行つたことであるからここには述べない。『中央公論』本年一月号「東亜協同体の理念とその成立の客観的基礎」及び「東亜問題」四月号「東亜新秩序論の現在及び将来」を参照し、これらの提案は今日なお未だ新秩序の独占的な地位、専売特許の地位を占めるものではない。更にそれ等は種々なる示唆を含んでいゝが、なお十分具体的な形態を備えるに至つていない。ただ単にその理想的な面が強く外へ出ているというだけである。現在抗日支那は確に民族戦争として日支戦争を行っている。この民族戦争を武力のみを以て解決せんとするならば、かつて元が南宋を滅ぼし、或いは清が明を滅ぼした場合の例に見ても民族戦争としての解決には何れも四十年ないし五十年も掛つていたのである。かくの如き民族的な抗争は多くの日本人にとっては本意ならざる発展である。日本は初めから支那と民族戦争を行う主観的な意図はない。それは政府の声明に始めから強調された所であり、また日本人一人一人の考え方を見ても、

現在の段階においては我々が直ちに新支那に対してこれを望むことは困難であらう。新支那はまずその政治的な権力を確立するためにだけでも日本がこれを支える弾力な支持を送らなければならない。それだけで新支那の力一杯である。ここに於ては支那事変をいかに解決するかという問題は、結局日本が支那の民族問題をいかに解決するかという問題に帰着するのである。結局支那問題の解決はこの大きな問題に繋がつていゝのであるという点を考えなければならないのである。日本の立場からすればこの点は何よりもまず新支那の発展助長という場合に於て十分考慮に採入れなければならない問題である。

かかる意味において我々は東亜新秩序の考え方に特別な注意を払うのである。それは一種の事変解決への希望であり、同時に具体的方式でもあるといひ得る。東亜における新秩序なるものの内容は積極的な意味を持つものである。東亜における新秩序という言葉は、現に日支抗争の場面の中から現われ出て来る具体的な結果を単に在るがままの形で言ひ出すのではない。新秩序は作らるべきものであつて、自然に出来るものではない。支那社会の持つ根本的な問題を解決し得るが如きものを作り出す所に新秩序の意義があるのである。

公式的に考えられている新秩序は日本軍の占領地域に出来上つた新支那を、日本の力によつて拡大強化して行くことによつて支那が新しく作りかえられ、かかる支那を一員とする日本、満洲国及び支那の結合の上に東亜新秩序が作られるのであるとする。しかしながら現実には新秩序は日本の強力的な一方的手

単に抗日政権の主体を叩くのであつて、別に支那の一人々々の民衆を叩くのではないという考え方はかなり普遍的であつたと思われる。しかしながら支那側においては現在これを民族戦争として展開せしめてゐる。この支那を百八十度日本の方へ向けなおして話し合ひをするということが困難であるということはおまりに明白である。しかしもしもこれに九十度だけ向け直し、考え直しを要求し、同時に日本自身も亦、九十度だけ身体を向けなおし、協調出来るものなら協調するといふような態度を表現した点がこの論のうちにはかなりあると思われる。現在の如き抗争のただ中で民族的協力を言うことは一見おかしいのであるが、しかも共通の目的が支那の再建、破壊された旧支那を新しく建直すという所から出発するのであるとすれば、これは確かに大きな積極的意味を持つものだと言ふことが出来るであらう。

東亜新秩序は現実にはまず新支那の領域に限られていゝのであるが、民族問題の解決者たることを志す限りにおいて支那民族全般を対象としたものでなければならぬ。勿論、支那事変の進行と解決を日本が大陸に対して本来有している要求を実現すべき一方的手段であるのみを考える見方もある。この立場からは、新秩序論の理想的な面、主張に対して批判ないしは不満があるといふことは寧ろ当然なことであらう。また、この新秩序建設の考え方が現在持つてゐる実際的な問題解決能力といふものは遺憾ながらまことに小さいといふことは、これ等の論者も十分これを知るべきであらうと思ふのである。

蒋介石は最近「東亜新秩序建設」^註について次のように述べている。

「東亜新秩序建設は中国併呑の別名である。もし近衛声明に基づいて和平条件の「和」を解釈するならば最早辞典中の投降の「降」の字は必要でない程である。中国の抗戦の目的は民族の生存、独立、自由の保衛完成にあり、この目的は一日にして達すべきものではなく、吾人の奮闘も一日にして休むべきものではない。現在戦局は益々拡大されつつあり、而して日本の新なる野心も更に顕著となりつつある。近衛声明の所謂「東亜新秩序建設」は日本の東亜に於ける独占的制覇と中国の消滅を必要とするのである、云々。」

註 四月十七日、重慶における内外記者団との会見談話中の一節。

新秩序論者はこれに対して答えねばならない。具体的な実践をもつて。

東亜の新秩序建設は支那の民族運動を根本的に解決、降参すべき歴史的課題を日本人に与えている。今日、抗日民族戦線運動として現われているやや畸形的な支那の民族運動は、根本的には支那社会の半植民地性、半封建性を解決してその長き歴史的な停滞性を脱却せんとする要求をもっているのである。支那民族運動の大乗的解決は、まさにかかる要求に応えたものでなければならないのである。

ここに於て、かかる歴史的使命の遂行に当るべき日本自体の主観的な力量を急速に備える必要が生ずるに至るであらう。それは、日支抗争の経過が否応なしに要求しているのである。

III 評 論

(一九三七・一一—一九・一一)